

# カトリックさいたま教区サポートセンター ボランティア活動報告

第7チーム・2011年5月9日(月)～14日(土)

## ■仙台教区ベースでの活動（岩手県釜石市） （青年男女各2人、計4名）

今回は釜石ベース（岩手県釜石市）で支援活動。被災地での瓦礫撤去も進み、現在では瓦礫撤去などの仕事は重機を使っただけのプロの領域となった。力仕事を想定してのぞんだが、老人ホームや保育園での支援という仕事もやった。震災後2ヶ月たって、それまで避難所で平等の条件で過ごしてきた被災者の間に、差異が生じはじめている。自宅に戻る人、他県に移る人、仮設住宅に入居できた人やまだ入居できない人など、被災者の生活状況も複雑化している。そして、それぞれがそれぞれの不満を感じている。地元の人相手には口に出せない心の中のを、ボランティアに向かって洩らすケースが見られた。幸いに仮設住宅に入り、家電製品などが完備しているのにその使い方が分からない、でもまだ入居できない人もいるのだから不満は言えない、そういう年配者と出会った。その方に洗濯機と炊飯器の使い方を実際に使って見せて教えた。仮設住宅に入ったことによって、仲間との間に溝ができてしまった、と感じている人もいた。これからの活動では、こうした声をさらにこまめに聞き取る意識がボランティアには必要だと感じている。

## ■湯本サポート・ステーション（福島県いわき市） （司祭1、信徒男女各2人、計5名）

傾聴ボランティアが活動の中心。最初、傾聴についてボランティア側の共通認識をもつ時間が必要だったが、肩肘はらないで「お話しにきました」と、語りかけることから始めてうまくいくようになった。地元の社会福祉協議会のボランティア・グループと協働することによって、よりスムーズな活動ができるようになった。2ヶ月間、がまんを重ねてきたがそろそろ限界に来ている被災者たち。吐き出したいこともたくさんあるようだ。今後の課題は、一度つながりができた人を継続してサポートする方法を見つけること。ボランティアは毎週メンバーが交

代するので、一人の被災者に1回だけ会って、1週間後にまた別のボランティアが来るという形になる。うまく引継ぎをして、傾聴する内容が深まる工夫をする必要があると思った。

## ■特別チーム・マッサージ（茨城県鹿島市） （女性2人）5月15日

8人にマッサージをした。2ヶ月間、敷布団なしの生活をしてきた被災者は、ほとんど例外なく体の痛みを訴えている。マッサージを始めるとすぐに皆話し始める。心がくつろぐからだろう。漁ができないことの寂しさを訴える漁師、避難所が閉鎖されるのでその後の住居について不安を感じている人、レトルト食品か弁当が主の食事について物足りなさを感じている人などさまざま。しかしショックは大きいけど落ち込んではいないように感じた。混乱してはいるがへこたれてはいない、そんな印象を受けた。今後のマッサージ・ボランティアの有効活用について話し合っていくべきだと思う。

## ■ボランティア派遣窓口からのお知らせ■

- 1) 仙台教区活動ベースへの派遣は、GW明けのボランティア減少で派遣できる人数が足りなくなり、やむなくしばらく延期することにしました。6月初旬から派遣を再開する予定です。今後も引き続きボランティアの登録をお願いいたします。
- 2) さいたま教区ボランティアは当初日曜日を外しての日程を組んでいましたが、現地報告により、土日の活動の需要がもっとあるということをもまえ、また社会人がもっと参加しやすいよう、派遣の日程を6月から、木曜日出発～火曜日帰宅に変更することにいたしました。ご了承ください。

## ■湯本サポート・ステーション（福島県いわき市） （助祭1、シスター1人、信徒男女各2人、計4名）

月曜日に現地到着後、常駐スタッフに豊間地区を案内された。がれきがたくさん残っており、重機による撤去作業にはまだ至っていないように思った。そこでお祈りをしてから活動を開始した。

傾聴ボランティアが主な活動だった。ただし、『傾聴』を意識するよりは何か必要かニーズを聞くことなどをきっかけに、いろいろな話に結びついて話題が広がっていた。その中で「先祖の人から『この地域には津波が来ない。来たとしても小さい津波しか来ないから、ここは安全なところだよ』とずっと言われてきた。だから今回の地震も大丈夫だと思っていた。それが命取りになって大勢の人が亡くなった」という話を聞いた。

一方、がれきがまだ残っている地域での撤去作業、泥かきの活動も行った。海の砂とヘドロが混ざって異臭を放つ中、ガラスなどをスコップで掘り起こして、土嚢袋に入れる－体力的に厳しい作業を70～80人のボランティアとともに行った。この期間に他教区から2人の司祭が湯本ステーションを訪れた。ともに被災現場を見に行ったら「やっぱり本当だったんだね」といった一言が心に残っている。



久ノ浜にて①

地震で崩れたがれきと火災で燃えた木材の山が、津波とともに浜の家々に押し寄せてきた。



久ノ浜にて②

## ■湯本サポート・ステーション（福島県いわき市） （シスター3人、信徒男1人、計4名）

活動の中心は傾聴だった。これまでは主に避難所で活動したが、仮設住宅や雇用促進住宅、代替アパートなどに移る方々が増えるに従って、避難所は次々に閉鎖されており、それに伴って活動の場所、方法も変えていく必要に迫られていることを感じた。

家のがれきの撤去や片付けが全く進んでいない方々、住む場所が決まらない方々がおられる一方で、生活が落ち着いてくるに従い、これまで抑えられていた孤独感や喪失感が顕在化して苦しんでおられる方々もおられる。今、最も助けを必要としている方々がどこにいるのか、どのような方法で必要に応えることができるのかを、避難所での傾聴、被災した家の片付け作業や仮設住宅の訪問などを通して、また、道で偶然出会う方々との出会いの一つ一つを通して探す毎日だった。

### ■ボランティア派遣窓口からのお知らせ■

※仙台教区活動ベースへの派遣は、ボランティア減少で派遣できる人数が足りなくなり、この2週はやむなく派遣を見送りました。6月2日から派遣を再開いたしました。